

2026年度入試 文学研究科 解答又は解答例及び出題意図

課程	博士課程前期
実施期	I期
科目名	文化人類学
	解答又は解答例 及び出題意図
〔I〕	<p>〔出題意図〕 近年のデジタル文化やオンラインコミュニティの急速な発展を受けて、それを実際に調査研究する場合を想定して志願者の研究立案能力を問うた。①研究題目（研究テーマを簡潔に表現するタイトル）と② 研究目的（どのような問題意識に基づき、何を明らかにしようとするのか）、③研究方法（どのような方法・手法で調査・分析を行うのか）、④予測される成果（研究によって得られる知見や学術的意義）の各項目の概要を記すことを通して、研究テーマやトピックにかかわらず、志願者が適切かつ妥当な研究計画を組み立てる能力を有するかどうかを問うているところがポイントである。</p>
〔II〕	<p>〔出題意図〕 いずれも文化人類学の基本的概念や専門用語についての基本的理解ができているかどうかを問うものである。</p> <p>(1) 「サピア=ウォーフの仮説」 Sapir-Whorf hypothesis 〔解答例〕 事象の認識は言語によって左右されるという理論。言語は人間集団の文化的経験を規定している、もしくは同一対象に対して、言語の違いによって認識の仕方が変わってくるという考え方を、その主張をした言語人類学者の名前を冠してこのように称する。</p> <p>(2) 「ポトラッチ」potlatch 〔解答例〕 北米のクワキトルやとリンギットなどの社会において、婚姻や葬送の儀礼の際に、主催者側と招待者側のあいだでおこなわれる食物や財の大規模な贈与。大量の消費と蕩尽は社会的地位の上昇につながるという点で、威信経済の一形式であると考えられる。</p> <p>(3) 「暗黙知」tacit knowledge 〔解答例〕 マイケル・ポランニーは「われわれは言葉で言えることよりも多くのことを知っている」と述べ、言語を通さず獲得される知識を暗黙知と呼んだ。たとえば自転車に乗る、水泳をするといった身体技法などがその例である。</p> <p>(4) 「伝統の創造」invention of tradition 〔解答例〕 われわれが伝統だと認識するものが、じつは長い時間的経過をへたものではなく近代以降の「発明」であったとする、歴史家ホブズボウムやレンジャーの編著書から一般化された概念。政治的な王室儀礼や国家行事、観光文化などに多く見られる。</p>

<p>〔Ⅱ〕</p>	<p>(つづき)</p> <p>(5)「現世利益」〔解答例〕 宗教的实践がおこなわれる根拠として、魂の救済や来世での願望成就といった超越的なものではなく、商売繁盛、家内安全、無病息災、学業成就などこの世での利得に重きをおく考え方。日本における新宗教の多くは、この現世利益の考え方を基調としている。</p>
<p>〔Ⅲ〕</p>	<p>〔出題意図〕 いずれも文化人類学史上、大きな貢献をはたした文化人類学者の業績を説明することを通して、文化人類学の学説的積み上げを説明できるかを問うものである。たとえばルース・ベネディクトは文化相対主義の立場から各文化の個性を心理学的なパーソナリティとして捉え、『文化の型』、『菊と刀』などを著した。ヴィクター・ターナーは英国社会人類学の立場から通過儀礼における象徴表現を研究し、コムニタスやリミナリティといった概念を提起した。ザンビアのンデンプ族に関する調査研究にもとづく『儀礼の過程』、『象徴と社会』などの著作がある。マルセル・グリオールは、マリのドゴン族の神話や宇宙論（世界観）に関する研究で知られるフランスの人類学者であり、『水の神』、『青い狐』などの作品がある。また教え子のジャン・ルーシュとともに映像人類学をも拓いた。石田英一郎は日本を代表する文化人類学者のひとりであり、ウィーン大学で学んだ歴史民族学・比較民族学的な視点から『河童駒引考』や『桃太郎の母』など、日本の民俗事象に関する人類学的研究をおこなった。</p>